

芝山はにわ物語

—古代の思いを未来へつなぐ—

歴史は過去のものではありません。

芝山町に残る古墳や埴輪には古代人の尊いメッセージが込められ、

私たちがそれをどう受け止め未来へつなぐのかが問われています。

昭和31年に地域住民の協力のもと発掘され姿を現した埴輪が、

令和6年に国の重要文化財に指定され、

改めて、脈々と流れてきた歴史の重みを再認識することとなりました。

いま、「芝山はにわ物語」の新しいページが開きます。



Haniwa clay figures from the Tonozuka and Himezuka kofun tumuli—commemorating their designation as an Important Cultural Property.

Shibayama Haniwa Story—Connecting ancient spirits to the future

History is not only about the past. Our Kofun tumuli and haniwa figures that were fashioned in Shibayama carry precious messages from ancient times. It is for us to receive them and carry them forward into the future. Unearthed in 1956 through the collective efforts of the local community, these haniwa figures emerged after centuries of slumber. Their designation as Important Cultural Properties in 2024 reminded us anew of the profound and unbroken history they embody. The connection between the town and its haniwa figures is presented from four perspectives: our town's haniwas as an Important Cultural Property, thinking about our origins, the fascinating characteristics of haniwa, and carrying their legacy into the future. A new chapter of the Shibayama Haniwa Story is now opening.

私たちのまちの埴輪が 国の重要文化財に

殿塚古墳・姫塚古墳から出土した埴輪が、なぜ国から「特に価値あるもの」と認められたのでしょうか。古墳と埴輪の関係からひも解いていきます。

古墳と埴輪の両方が 国の文化財に指定

令和6年（2024）8月、殿塚古墳・姫塚古墳から出土した埴輪48点が国の重要文化財に指定されました。対象となった埴輪は、昭和31年（1956）の発掘調査で出土したものです。すでに昭和33年（1958）には殿塚古墳・姫塚古墳を含む芝山古墳群（別称中台古墳群）が国指定史跡となっており、66年の時を経て晴れて古墳と埴輪の両方が国の指定文化財となりました。これは千葉県内で初めてのことです。そもそも古墳というのは有力者たちのお墓で、その周りや上に立て並べられ

て古墳を飾ったのが埴輪です。日本で古墳がつくられたのは、3世紀中頃から7世紀頃までの約400年間とされています。古代日本の中心は近畿地方ですが、遠く離れた関東地方にも有力者がいて、古墳時代に豊かな暮らしと文化がこの地に花開いていたことを伝えてくれるのが古墳や埴輪なのです。

2つ寄り添う前方後円墳

芝山町一帯には、かつて500基もの古墳があったとされ、千葉県内でも有数の古墳の密集地帯として知られています。17基からなる芝山古墳群は、古墳時代後期の6世紀後半から7世紀にかけてつくられたとみられます。そ

の中心となるのが殿塚古墳と姫塚古墳で、いずれも前方後円墳です。ここには武社のクニ（古墳時代の山武郡北部あたりの呼び名）の支配者に連なる豪族が埋葬されたと推測されます。

印象的なのは、同じ形の2基の古墳が寄り添うように並んでおり、片方がやや小ぶりなことです。まるで夫婦の古墳のように見えることから、いつ頃からか殿塚・姫塚と呼ぶようになったと

芝山町史に記されています。また、周りに巡らせた二重の溝（周溝）の形が長方形というのは非常に珍しく、全国でも数えるほどしかありません。そのほとんどが芝山周辺に集中しているため、この地域に独特な形状だと思われま

人物や動物など多彩な埴輪

さて、古墳時代は古墳の形や大きさ



① 芝山公園内にある埴輪列をイメージした殿塚古墳の縮小模型
② 殿塚古墳（墳丘長約89m）と姫塚古墳（墳丘長約59m）のジオラマ模型
③ 町立芝山古墳・はにわ博物館



で身分を表す時代であり、大きい古墳ほど大きい埴輪が並び、その数や種類も多くなります。殿塚古墳・姫塚古墳からも良好な状態の大型の形象埴輪が出土しています。

今回、国の重要文化財に指定された埴輪は、殿塚古墳出土30点、姫塚古墳出土18点です。特に注目されたのは、姫塚古墳から形象埴輪列が発見されたことです。形象埴輪というのは、家、武器・武具などの器財、動物、人物をかたどった埴輪のことです。墳丘北側の中段テラス（平坦面）から、馬子と馬をはじめ、独特な風貌の男性像、正装の女性像、弾琴像など多彩な埴輪が出土しました。

埴輪の列は何を意味するのか

この埴輪列がなぜ注目されたのか、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館の学芸員は次のように話します。「形象埴輪群像が築造当時の位置をほぼ保った状態で出土したのは全国的にも非常にまれであり、学術的な価値が極めて高く注目されました。さらに当時、葬列のようすを再現しているのではないかという説が提唱されかなり有名になりました。しかし、実際の出土状況を見ると、

埴輪が仰向けになって横に並んでいたことから、行列（葬列）ではなく古墳を見上げる人を意識して外に向けて立て並べられたと考えられます。埴輪について書かれた古墳時代の文献は存在しないため、人物を中心とする形象埴輪群像をどう解釈するのか、現在もさまざまな学説が飛び交っています」

現在に至るまで、葬送儀礼説や首長権継承儀礼説をはじめ、葬列説、職能集団による芸能祭祀説や亡き首長の生前顕彰説などが提唱されています。関東地方では古墳時代後期に埴輪祭祀が最盛期を迎えており、姫塚古墳での発見がきっかけとなって形象埴輪列への関心が高まり調査・研究が進められました。近年では、平成26年（2014）から27年（2015）にかけて早稲田大学が形象埴輪のデジタル3次元計測などの新しい技術を用いて3D画像を作成しており、殿塚古墳・姫塚古墳の埴輪をよりリアルに再現できるようになりました。

もちろん、実物を見ることで感じ取れることも多くあります。町立芝山古墳・はにわ博物館に行けば、東日本を代表する造形美に優れ、現代の私たちの心を引きつけてやまない重要文化財の埴輪に会うことができます。

第2章

原点を振り返る

地中に眠る歴史を掘り起こした昭和31年の発掘調査。人との出会い、住民の熱意、戦後最高ともいわれる発見など、いくつもの心踊る物語があります。



- ① 埴輪の説明を行う滝口教授(中央)
- ② 完形に近い状態で出土した人物・馬子
- ③ 発掘に参加する地元の中学生。発掘日誌には二川中学校や千代田中学校など「中学生多数」が参加したと記されている
- ④ 殿塚古墳の石室内調査風景
- ⑤ 姫塚古墳の石室入口。大型の切石を用いて石室を構築している
- ⑥ 上空から望む芝山古墳群。写真中央が殿塚古墳と姫塚古墳
- ⑦ 殿塚古墳・姫塚古墳と桜
- ⑧ 発掘調査の発端となった芝山仁王尊



住職と教授の出会いから

昭和30年（1955）、二川村と千代田村が合併して芝山町が誕生しました。殿塚古墳・姫塚古墳の発掘調査が行われたのは翌31年のことです。

そもその発端は、芝山仁王尊の瀧名徳永住職が、僧侶として人々のためにすべきことを模索する中で、寺の文化事業として芝山古墳群の発掘調査を思い立ったことです。瀧名住職が母校大正大学の恩師・古江亮仁教授に相談すると、遺跡発掘で実績のある早稲田大学の滝口宏教授を紹介されます。これにより、地元と早稲田大学考古学研究室、千葉県教育委員会による発掘調査が実現することとなりました。

当時、日本は高度経済成長期に入り、「もはや戦後ではない」が流行語となる時代でした。開発により文化財が次々に失われていく状況を憂い、調査にあたっては「地域の人々に古墳の価値を知ってもらうこと」「地元に保存館を整備して資料を保管すること」が方針とされました。

住民が総力をあげて協力

この調査の大きな特徴は、町ぐるみ

で総力をあげて取り組んだ。地域発掘と呼べるものだったことです。滝口教授と学生に加え、地元の消防団、青年団、婦人会などの団体、中学生や高校生、教員も集まりました。調査を手伝う住民が自転車にクワやシャベルをくくり付けて駆けつけたほか、湯茶の接待をしたり見学者が乗ってきた自転車を整理したりと、さまざまなかたちで協力をしています。また、芝山仁王尊では調査する学生のために客殿を解放し、宿泊・食事など生活面もサポートしました。このように地域住民がボランティアで調査に参加した事例は、当時も現在もほとんどありません。さらに、京成電鉄と成田バスの協力により、都内200校の社会科教員を無料招待するなど、「芝山古墳ブーム」が町を超えて広がりました。

姫塚古墳での大発見

発掘調査は、戦後最高ともいわれる大きな成果をあげています。まず3月27日に殿塚古墳から調査が始まりましたが、埴輪は小片の出土にとどまりました。一方、3月29日に姫塚古墳の調査に着手すると円筒埴輪列が見つかり、翌30日には「正午頃、前方部中段の北西隅地点より地元住民が形象埴輪（人

物・馬）を発見し、午後から東側へ拡張した」と記録されています。31日もアゴヒゲの男性像などが出土し、その後4月1日から6日の第一次調査最終日まですべて姫塚古墳の記録のみとなっており、連日、形象埴輪や遺物の発見が相次ぎました。このことから、当時の位置を保ったまま横倒しになっている形象埴輪列の大発見により、人員が一気に姫塚へ集中したようですが読み取れます。なお、4月28日から5月6日までの第二次調査は殿塚古墳を中心に行われ、後円部南側に開口する横穴式石室から多数の副葬品が出土しましたが、姫塚古墳に匹敵するような状態の埴輪列は発見されませんでした。その理由について芝山町立芝山古墳・はにわ博物館の学芸員は、「姫塚古墳に比べて殿塚古墳の埴輪の状態が極めて悪いのは、おそらく中段テラスの位置が高くて幅が狭かったことにより、早い段階で埴輪が転落してしまったためと思われます」とみています。

発掘後も重要な作業は続く

発掘された埴輪は、比較的大きな破片が良く残っているものから、細かな破片になっているものまでありますが、それらを復元したものが博物館に展示



特別な道具や珍しい魚の埴輪も

●珍しい魚の埴輪などが続々出土

大里・白柵地区から出土した極めて珍しい魚の埴輪は、かつて近くを流れる高谷川に鮭が遡上していたことから、鮭を表現したものと考えられています。殿塚古墳から形象埴輪列が発見されており、馬、馬子、武人、琴を弾く人、頭に壺を載せる女子、家などバラエティに富んでいます。また経塚古墳からもアゴヒゲの男子や島田髭を結い首飾りを付けた正装の女性像などの埴輪が出土しています。



●殿塚古墳から出土した“特別な道具”

殿塚古墳からは、千葉県ではあまり見られない器財埴輪も出土しています。これは、墓に悪霊が取り憑かないようにと、王や首長の権威を表す武器・武具などをかたどった埴輪です。例えば、高さ116cmの「翳」は、長柄の団扇をモチーフにした埴輪です。貴人が外出するときに従者が差しかざして、顔を隠すために使われました。また、同じ高さの「鞞」は、矢を入れて背負う武具の一つです。



矢を入れる鞞

手作りの趣や造形美を感じ取る

●地域の古代を知る手がかり

人物や動物の埴輪は見た目に分かりやすく、古代の生活や習慣をはじめ、衣服や髪型などを知る手がかりがつかめます。赤や白、黒などで着色した埴輪もあり、顔には魔除けの化粧をすることが多く、塗り方にも地方の特色が現れます。



●埴輪のルールと表現の趣

埴輪には一定のルールがあり、ヘビやトカゲなどの爬虫類や竜などの想像上の生き物はこれまで発見されていません。人物なら身分の高い王・首長や武人に貴婦人、楽器を奏でる人、巫女など、動物なら馬、牛、犬、鶏などの家畜、猪、鹿、水鳥、魚などの獲物が作られました。埴輪らしい表現として、特徴を強調したり形を簡略化したりするため細部まで精巧なわけではありませんが、一つひとつ趣があります。

●トップレベルの造形美

この地域の埴輪の造形は関東地方でもトップレベルと評価されており、大きな埴輪を作るには高い技術力が求められます。これだけ数多くの埴輪を作ること自体が、儀礼の一部になっていると思われます。



埴輪ブームと芝山の埴輪の特徴

●埴輪ブーム到来！

令和6年に東京国立博物館で「はにわ」展が開催されたのをきっかけに、全国的に古墳ブーム・埴輪ブームが巻き起こりました。まるで古代のアイドルのように「推しはにわ」を見つけて楽しむなど、埴輪ファンの裾野は広がっており、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館の来場者も増えています。

●芝山の埴輪は大型で写実的

芝山町周辺で出土した人物埴輪は、大型の全身像が多く、衣服や装身具なども写実的なのが特徴です。目や口は細長い穴がぽっかりあいているだけなのに、なぜか表情豊かに見えます。個性あふれる埴輪は、どれも見ていて飽きません。

豊かなヒゲの男たち＝姫塚古墳の形象埴輪列

●埴輪列を率いる馬子と馬

姫塚古墳の形象埴輪列の先頭グループには、馬を従えて左手を高々と上げた半身像の男子がいます。編笠のようなかぶりものや半袖の簡易な上衣、腰に鎌を下げていることなどから、馬の飼育を担った馬子(馬曳き)と思われます。一方、連れている「飾り馬」は高さ133cm(復元)、見るからに立派な馬具一式を装着し、額や胸に丸い鈴、両側に鈴舌葉などの飾りを付けています。



●豊かなヒゲの男たち

馬の後ろに続くのが、最も有名な「アゴヒゲの男」です。豊かなヒゲを蓄えて大刀を持つ同形の男性像が複数個体出土しています。最も高いものは、通称「背の高い男」で、台座を含めた高さは約163cmと大型です。鼻が高く、つば付きの帽子(または天冠)をかぶり、手甲をつけた左手で腰の刀を握り、上衣を紐で結んでいます。これは実際の姿をもとに理想像として作ったものの、あるいは渡来人ではないかという説もあります。



足もとにも結び目が



第3章 埴輪の魅力

芝山町の埴輪は魅力がいっぱい。大型で形がリアル、しかも人物や動物などに特徴的なものも多く、見どころをつかめば古代への案内役となってくれます。さあ、じっくり観察してみましょう。どの埴輪も手作りなので、2つとして同じものはありません。古代人の技術力や表現力に驚いたり感心したり……。奥深くて面白い埴輪の世界に、皆さんをご案内します。

未来へつなぐ

埴輪の宝庫として広く知られる芝山町。この地に刻まれてきた古代人の営みや、時代に左右されることのない歴史の価値が、未来へと受け継がれていきます。



古代人を迎える 「芝山はにわ祭」

毎年11月の第2日曜日、町が古代にタイムスリップしたような特別な一日となります。芝山はにわ祭は、現代の人々が忘れかけた古代の心の豊かさに思いをせよと、昭和57年（1982）に始まりました。かつて、芝山町の住民が成田空港建設をめぐって意見を二分した時期があり、町民の心を一つにしようと願った有志7人の発案がきっかけです。令和7年（2025）には第40回を迎え、現在も町民の融和と観光のシンボルとなっています。

当日は朝から、「古代人の行列が通りますよ」という非日常の言葉が飛び交います。殿塚・姫塚古墳での「降臨の儀」から始まり、芝山仁王尊での「交歓の儀」、芝山公園までの「行列の儀」、芝生広場での「歓迎の儀」、お見送りする「昇天の儀」まで（令和7年は雨天のため一部を芝山文化センターで実施）、華やかな中にも厳かさが漂う儀式が行われます。

見守る観客は、威風堂々たる国造のたたずまい、華やかな舞巫女、古代人

に扮した小・中学生や大人たちの行列に目を奪われます。古代を再現した衣装と、目の周りや頬を赤く塗った化粧が印象的です。

優雅で可憐な舞巫女

芝山はにわ祭でひときわ注目を浴びるのが巫女の舞です。舞巫女を務めるのは中学生や高校生たちで、当日に向けて約1カ月前から練習を重ねます。「先輩たちが舞う姿に憧れて、自分も参加しました。当日は完璧な舞を見てもらいたいです」と決意を語る中学生。熱心にアドバイスをするのは女性会の有志の皆さんで、初代の舞巫女を務め、その後40年近く舞の指導を続けてきました。「子どもたちがみんな一生懸命だし、上達していく姿を見られるのは楽しいですね。母娘2代で舞巫女をす



る人もいますよ。芝山はにわ祭が続いているのは幸せなことですよ」と話す皆さん。大先輩から10代の子どもたちへ、しっかりと伝統が受け継がれています。いよいよ当日を迎え、見事な舞を披露した舞巫女たち。「みんなと一緒に思い出を作ることができて楽しかったです」と笑顔で話してくれました。

見学から体験イベントまで 芝山古墳・はにわ博物館

地元で出土した貴重な埴輪を間近で見ることができ、町立芝山古墳・はにわ博物館。昭和63年（1988）に開館し、房総の古墳と埴輪を紹介してきました。令和3年（2021）にリニューアルオープンし、殿塚古墳・姫塚古墳から出土

した埴輪を含め、展示資料がさらに充実しています。文化財未指定の埴輪も、学術的価値が高いのが特徴です。博物館の入口は横穴式石室を模しており、古代へと続くタイムトンネルのようでわくわくします。子どもたちに古代への関心を深めてもらおうと、5月の連休や夏休みには「勾玉づくり」や「火起こし体験」などのイベントを開催。家族での参加も多く、毎回好評です。

歴史という町の宝を、未来へ

いたるところで埴輪に出会えるのが、芝山町の面白さ。町を縦断する県道62号・愛称「芝山はにわ道」沿いには、大きな埴輪のレプリカが立ち並んでいます。



- 1 芝山はにわ祭の舞巫女
- 2 古代人に扮した小・中学生や大人たちの行列
- 3 国造を中心に古代人が勢ぞろい
- 4 古代を再現した衣装と化粧を身にまとう
- 5・6 放課後に巫女の舞を練習
- 7 巫女の舞の指導をする女性会の皆さん
- 8 町立芝山古墳・はにわ博物館
- 9 博物館の人気イベント「勾玉づくり」
- 10 芝山中学校で生徒の成長を見守る埴輪（レプリカ）

古代と現代が交錯しながら紡がれてきた芝山の埴輪物語。それを今に伝える数々の遺産は、町民みんなの宝です。その宝を大切にすることで郷土愛が育まれ、芝山の歴史が未来へとつながっていくでしょう。

協力および写真提供…埴輪所蔵…芝山仁王尊・観音教寺／埴輪展示…芝山町立芝山古墳・はにわ博物館／埴輪資料写真撮影…奈良文化財研究所・中村一郎／発掘調査写真提供…芝山町立芝山古墳・はにわ博物館